

## 高額な土地を売つてもらつたきっかけは

直接のきっかけは、そこはもの凄い広い庭なんですね。その庭にはツツジがありまして、花が咲き終わった後、花を摘んでおくと翌年もきれいに咲くんです。ところが放つておくと実がなつてそこにエネルギーが行つちやうんです。そうしますと年々ツツジの木は弱つていくんです。ということは、やれとは言われないんですけど、そうすると良いな…と家内が聞いてきたんです。私と室内と一人でやりました。もしか私が期待したら、そんなことをできないですね。自分の期待が叶えられるわけないですから。人はAをやればBになるとわかっていることはみんなありますよね。ところがAをやつて、Bになるのか、Cになるのか、Dになるのかわからないとやらない。私はAのことが何に繋がるかは期待しないです。やることは良いことには違いないから、やるんですね。何かを期待すると、期待通りにならなかつたときにはできないですね。私の場合、全く期待なしやつたのか?と言いますと、期待が遠くの方にあるわけでした、これをやつたらこうなるんじやなくて、Aをやつたらイロハのイになるかもしれない、とんでもない、しかし必ず良いことに繋がる。そういう期待はありましたね。二宮尊徳翁が目先のこと期待してはいけない、長期的な期待をせよと教えておられますけど、まさにそうで、私は遠くの方に期待を置いたんです。そうしますと、私のやつてることは、糠に釘ということがありますが、それどころじゃない、空中に釘を打つんです。誰からも理解されない。ところが空中に打つた釘が止まるんですね。最初は点だったものが線になつて、面になつて

繋がつてきました。そのことを中国の教えで「十年偉大なり、十年間心を込めてやると偉大な力になる。」「三十年恐るべし、二十年やると恐るべき力になる。」「三十年にして歴史なる、一つの歴史といえる。」私の場合はまさにこの中国の格言通りになつていています。十年経つたら、社員の人が命令されなくともやるようになつた。二十年経つたらほとんどの人がやる。三十年経つたら社外から掃除を教えてくれと頼まれるようになつた。

## 業績はどのように推移してきましたか?

右肩上がり一辺倒できたわけではないですね。まず最初は細々とした小売店に対する卸業、零細な一軒一軒に数千円、ちょっと大きても五万円とかの請求書を出して、やがては小売店に卸をする卸業者に卸をするという商品を開発したり、メーカーさんに作つてもらつたり、そういうことができるようになつたんです。やがてそれが主流になつてきたんですけども、残念ながらこの業界は簡単に始めて簡単に潰れるんです。そういうことが多かつたです。そこで昭和44年からですけども、ビッグストアが店舗展開する中にカー用品も入れたいということで、私ももそれに入させてもらいました。非常に調子よく行きました。しかし、ビッグストアの商売の仕方を見ると、商人としては決して良いやり方ではないと思つたんです。そこで決別をして、今度は卸業から小売業に転換して、51年から始めて53年頃に転換し終えました。しかし、その昭和51年当時、年商が51億円というときに約29億円、60%占めていた取引を辞めるわけですから、これは会社の浮沈を賭けた生き方、よく人から「それは背水の陣ですね」と言われたんですね。背水の陣ではなく、水中の陣でした。鼻の下まで水が来ていて、一歩も下がれない。一步下がつたら息ができない。息するのがやつとの状態でした。

## 便教会新聞 第138号

平成30年8月  
第18回 便教会総会  
8月25日(日)午前10時~午後3時

便教会は、教師の教師による教師のためのトイレ掃除に学ぶ会です。「方法論や技術や手法ではなく、人には必ず逢える。しかも、一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない時に。」という言葉そのものです。トイレ掃除を続けていると、そのとき、自分に必要不可欠な出逢いがあります。

越智先生は第3回の愛媛便教会から参加して下さいました。私たちと出逢う前から掃除を大切にされていて、毎朝欠かさず生徒と一緒に清掃活動をされています。忙しい部活の合間にぬつて、時には同僚の先生と、時には生徒と一緒に参加して下さいました。心が強く、目の前の子どもたちを大切にされていて、心から教師として尊敬できる方です。

## 「えひめ掃除に学ぶ会」

愛媛便教会にとつて欠かせない存在が「えひめ掃除に学ぶ会」です。立ち上げの際に、ご迷惑もおかけしましたが、18年続く「えひめ掃除に学ぶ会」に学ばせていただきながら、ともに歩み愛媛県全体に活動を広げていきたいと感じます。自分達の学校や町を大切にする心を子どもも大人も一緒に磨いていく、そんな愛媛便教会にしていきたいと強く思うようになりました。

## 「先施」

愛媛便教会世話人  
新居浜市立角野小学校  
教諭 真鍋 裕介

11年前、愛知県東海市立富木島中学校で教師の人生を歩み始めました。恥ずかしながら、本來自分はプライドが高く傲慢で、謙虚ではありません。教師初任の年、その自分の弱さと未熟さで学級崩壊に近い状態にしてしまいました。生徒との関係は最悪、スタートを切れます。その状態から救つてくれたのが掃除でした。そして、これから日本を創る子どもたちを育てるという、教師の仕事の大切さ素晴らしさに気付かせてくれたのも掃除でした。

結婚を機に故郷、愛媛に戻りました。糸余曲折ありました。平成29年3月19日、愛媛便教会を立ち上げ、活動回数は18回となりました。多くの出逢いが感動を生み、感謝の心を育み、活動を支えてくれています。また続けることで新たな展望が見えてきました。

「愛媛便教会1年半を振り返つて」

多くの方に支えられスタートした愛媛便教会は、毎月1回勤務校である角野小学校のトイレを掃除しています。はじめは家族3人で行っていましたが、新居浜市立泉川中学校の越智誠司先生と、(株)ザ・ワークスの金本瑞樹さ

れで、毎月1回勤務校である角野小学校のトイレを掃除しています。はじめは家族3人で行っていましたが、新居浜市立泉川中学校の越智誠司先生と、(株)ザ・ワークスの金本瑞樹さ

金本さんは、日本を美しくする会の四国ブロック大会でご縁をいただきました。金本さんも職場でトイレ掃除を続けられてきた方で、フットワークがよく、細かなネットワークで同僚を誘つてくださり参加人数が増え、活動の勢いが増しました。参加者の中に、角野小学校の児童と保護者、卒業生がいたことが何よりも嬉しかったです。温かい心とリーダー力で、一緒に掃除をすると心強の方です。

お一人の心、言動にいつも感心しています。志を一緒にして活動できることを感謝しています。この愛媛便教会を立ち上げたからこそだと実感しました。

この1年半の実践で教師、児童、生徒、保護者が大事なんだとよく言われ、「そだな…」と頷くものの、胸の内に燃えるものがあつて、そこから沸き上がる力、広がつてほしいという願い、実践がないと広がつていいかないだろう願っています。「きれいを広げる」と同じように掃除の種まきをして、多くの人に掃除の素晴らしい力を実感してもらいたいと思っています。今までどれだけの人に声をかけ一緒に掃除をしたかはわかりませんが、どうし

ても次の世代、若者、若い先生に掃除の魅力を伝え、育てていって欲しいと心から願っています。そこで、断られても、相手にされなくとも、試行錯誤しながら働きかけをします。なぜ、徒労と思われがちなことに熱心になれるかと、いうと、掃除で救われた生徒、先生、学校を目の当たりにして、そのビフォーアフターの差の大きさに驚くからです。みんな歓喜の表情で水を得た魚のようにいきいきします。そんなときは、掃除をやってて良かつた、発信してきて良かつたと心底うれしいです。今までそれに入させてもらいました。非常に調子よく行きました。しかし、ビッグストアの商売の仕方を見ると、商人としては決して良いやり方ではないと思つたんです。そこで決別をして、今度は卸業から小売業に転換して、51年から始めて53年頃に転換し終えました。しかし、その昭和51年当時、年商が51億円というときに約29億円、60%占めていた取引を辞めるわけですから、これは会社の浮沈を賭けた生き方、よく人から「それは背水の陣ですね」と言われたんですね。背水の陣ではなく、水中の陣でした。鼻の下まで水が来ていて、一歩も下がれない。歩み愛媛県全体に活動を広げていきたいと強く思うようになりました。

便教会世話人 高野修滋

【編集後記】「広げる」のではなく「広がる」が大事なんだとよく言われ、「そだな…」と頷くものの、胸の内に燃えるものがあつて、そこから沸き上がる力、広がつてほしいという願い、実践がないと広がつていいかないだろう願っています。「きれいを広げる」と同じように掃除の種まきをして、多くの人に掃除の素晴らしい力を実感してもらいたいと思っています。今までどれだけの人に声をかけ一緒に掃除をしたかはわかりませんが、どうし

ようとしませんでした。そのとき、その6年生の女の子が「一緒にやろう、おいで。」と声を掛け手をつないでいきました。そして一緒に水濾しをやつたんです。お父さんから離れて一所懸命磨いているんです。グループの反省会で、小さな女の子は恥ずかしそうに笑って「おそうじがんばりました」と言いました。感動しました。子どもの力はすごい。掃除がその小さな女の子の心を開きました。6年生の女の子に学ばせてもらいました。

今年の4月、参加し続けて1年経った時、えひめ掃除に学ぶ会のご厚意で掃除道具を1セツトイただけました。愛媛便教会の活動を理解して下さり、認めていただけたのだと感じました。同じ方向を向いてともに歩み、愛媛県全体をきれいにする活動を広げていけるのだと思うと、とても嬉しかったです。有難うございます。

言歸正

と、続けると気つくことが増えてきました。その中には反省と課題があります。向き合って解決していく過程が愛媛便教会の成長、進化、進歩です。一つ目は「計画力」です。毎月実施することは決まっていますが、第何週の何曜日と決めてはいません。私たちの都合で日程を決定してメールを送っています。その連絡が直前になることもあります。たくさんの方に参加していただくためにも、しっかりと計画を立て、連絡を怠らないようにします。二つ目は「慣れ」です。毎月2回（便教会+掃除に学ぶ会）行っていると、「慣れ」が出ていたりました。ある時、初めての方が私の隣で試行錯誤しながら掃除をしているとき、「この汚れは取れる、この汚れは取れない」と経験で判断し、上から目線になっていました。一所懸命に取り組むこと

## 一 愛媛便教会が目指すものに

これからの愛媛便教会活動が地域に根ざして学校や町、地域を大切にする心を育していく一助となることを願っています。11年前に勤務していた学校は愛知県東海市にあり、儒学者細井平洲先生誕生の地であります。『先施』、先（ま）ず施（ほどこ）すという教えがあります。相手からの働き掛けを待つのではなく、自分の方から働き掛けなければならない。自らの働き掛けが、人の心を動かす。特に上下の関係にあっては、上に立つ方から、進んで働き掛けることが大切であるという考え方です。まず、私が率先垂範し、参加者のみなさんに「参加して良かった、また参加したい」と喜んでもらえるようにがんばっていきます。小さな灯火ではありますが、四国4県すべてに便教会が立ち上がるよう奮闘を続けていきます。

生徒会に入つて生徒会長となり自分に付加価値を付けたが、頭がよくなるわけでもなく、自己肯定感が湧かなかつた。僕は何をしてもだめでうまくいかないんだ、と思うようになつた。大学受験を迎へ、「将来何になりたいか」と考えたとき、小学生のころから褒められたかった、認めてほしかつた“先生”になろうと思つた。3年生の秋、授業後の廊下を歩いていると、トイレの前にブルーシート、その上に整列された道具。中の様子をのぞくと、前年、英語を教えてくれた高野先生が同級生と小便器に向き合つて熱心に掃除をしていた。「今はトイレを使えないよ。他のとこ行つて。」高野先生は忙しそうにそう言つた。大学受験の勉強から逃れたくて、「僕にも手伝わせて下さい。」そう言つた。それから、毎週水曜日の業後は学校のトイレを掃除した。勉強がうまくいかない中、唯一の温もりだつた。トイレ掃除は一回で2時間くらいかかるが、その間は勉強のことを考えなくていいし、いいことをしているという意識が自己肯定感となつた。

大学は九州の大学に進学した。大学生活も自分が過ぎたころ、高野先生から「今年、長崎でお掃除しましよう。」と突然連絡が入つた。今さらトイレ掃除なんて……と思った。でもせつた。かく高野先生が来てくれるなら、そう思つて友達と一緒に参加することにした。「初めてトイレ掃除をする人が多いから、場谷くんが掃除の仕方教えてあげてね。」高野先生にそう言わると、急に焦つた。2年以上のランキングがあつたからだ。便器の前で説明をしながら実践すると、みんな同じように真剣に取り組んでくれた。言葉だけではなく、範を垂れることができいかに大切であるか学んだ瞬間だった。子どもたちに気を配りながら僕も久しぶりのトイレ掃除を楽しんだ。

参加したみんなの顔が一層明るくなることを初めて実感した。掃除後、懐かしい気持ちになつた。大学生になって、新しい土地で一人暮らしをして、別人になつたような気がいた。しかし、高校から続けていたトイレ掃除を久しぶりに行って、原点に立ち戻った気がした。少し中だるみしていた自身の生活を引き締め、自分が何をしに九州まで来たのか、振り返るいきっかけになつた。初心を思い出し、講義も出席するだけではなく、眞面目に取り組んだ。結果は実り、三年生では学科の成績優秀者に選ばれ、大学から表彰された。この知らせは遠くの親にも届き、とても喜んでいたのが嬉しかつた。

大学時代のトイレ掃除はこの回を含めて九州で3回、長期休暇で地元に帰省したときに2回、その中でも平成27年6月から、地元の西尾駅を月に一回掃除する活動が始つた。今も拡大しながら3年以上続いているこの会の初回に参加できたことはとても光栄だ。

大学卒業後は、実家に戻り高校の非常勤講師として働くことになつた。大学では座学ばかりで、自分で授業を組み立てて、生徒を前にして50分授業することに不安しか感じなかつた。若さだけが取り柄で、生徒との距離は比較的近かつたが、授業になると退屈そうな顔をしている生徒に日々申し訳なさを感じていた。“自分は教師に向いていない”何度もそう思つた。週末、月に一回ではあるが、先述した西尾駅のトイレ掃除になるべく参加した。朝も早く、面倒だと思うこともあつたが、何より僕が行くと高野先生が喜んでくれて、一緒に掃除する地元の人たちも温かく迎えてくれるのがうれしかつた。次第に掃除する駅が1つ増え、地元の観光名所にも手を伸ばすようになり、にしお市民活動センターに「西尾を美しくする会」として登録、新

たなスタートを切ることができた。トイレ掃除の言葉に「きれいを広げる」という言葉があるが、今まさしく西尾ではきれいが広がっている。僕は今、豊田市の高校で常勤として働いている。非常勤のころより格段に忙しくなったが、生徒や保護者、他の先生と接する機会も格段に多くなつた。何か自分の意見を話すとき、教育に対する思いや自分自身のことを聞かれたとき、思い出すのは今続いているトイレ掃除の活動である。トイレは使うときと掃除をするときで目線が全然違う。使う側の目線では一見きれいそうでも、腰を下ろし、掃除する側になるとたくさんのがれに気づく。教師という職業は特に、この目線の切り替えがとても大切だと思っている。教師の目線では気づかない問題でも、生徒の目線、保護者の目線、地域の目線、立場を変えて見てみないと気づけない問題が数多くある。トイレ掃除は夏は暑いし冬は寒い。臭いし汚い。けれどみんなで掃除をすると、協力し合うことの大切さ、僕の知らない様々なことを教えてくれる。高校生のころは受験勉強から目を背ける一心で行っていたトイレ掃除が、社会人になった今では自分のルーツを再確認し、また頑張るためのいい休憩所になつてている。仕事がうまくいかずに悩んだとき、将来の不安に押しつぶされそうになったとき、仲間たちと協力して一つのトイレ掃除をすると、心に余裕ができる。明日からまた一步踏み出せる。高校生のころと比べても、僕はまだ自分が一人前になつたとは思っていない。しかし、一緒に掃除する仲間は本当にみんな輝いている。みんなの“眞面目”や“ていねい”がとてもかっこいい。だから、トイレ掃除を通じて僕もみんなと同じようになります。輝く、かっこよくありたいと強く思う。

小学生の頃、おとなしく本を読んでいるようなタイプだった。学年が上がっていくにつれ、友達も増え、その中でも上位グループ（運動や勉強がよくできる集団）に属していいと思うようになつた。努力のおかげで先生にも親にもよく褒められたが、そのせいで失敗や怒られることを極端に恐れるようになつてしまつた。中学生になると、クラス役員の中でも目立つポジションをキープした。高校受験は地元の進学校を選んだが、合格ラインに余裕はなく必死に勉強しないといけなかつた。がんばつた甲斐あって合格を勝ち取つた。親の喜ぶ顔が嬉しくて、自分でも頑張ればできる、そう思つた。しかし、高校での勉強はついていけなかつた。

が大事であり、いつの間にか結果に重きを置いていました。「初心忘るべからず」です。三つ目は「リーダー」です。参加して下さる人や先生に感動してもらいたい。実際にリーダーの声掛けや行動で、その日の学びや感動、グループの雰囲気が変わると感じたことがあります。もつと学ばなければいけないと感じています。さらに、人数が増えてくることも考えて、自分たち以外のリーダーを育てるとの必要性も感じています。四つ目は「道具の管理」です。道具の管理はとても悩んでいます。人数が増えて、チームででき、皆さんの笑顔が見られるのはとても嬉しいのですが、トイレ掃除が終わって帰つてからのもう一勝負に心が負けそうになる時があります。道具を準備して下さる人がいることの有難さを身に染みて感じています。今はタオルを洗つて下さる方のご協力で大変助かっています。

小学生の頃、おとなしく本を読んでいるようなタイプだった。学年が上がっていくにつれ、友達も増え、その中でも上位グループ（運動や勉強がよくできる集団）に属していくたいと思うようになつた。努力のおかげで先生にも親にもよく褒められたが、そのせいで失敗や怒られることを極端に恐れるようになつてしまつた。中学生になると、クラス役員の中でも自立つポジションをキープした。高校受験は地元の進学校を選んだが、合格ラインに余裕はなく必死に勉強しないといけなかつた。がんばつた甲斐あって合格を勝ち取つた。親の喜ぶ顔が嬉しくて、自分でも頑張ればできる、そう思つた。しかし、高校での勉強はついていけなかつた。